

[ 論文 ]

# 異言語間コミュニケーション方略としての言語混合

—— ドイツ・ポーランド国境地域の事例から —— <sup>(1)</sup>

木村 護郎クリストフ

## はじめに

言語は、境界の形成と乗り越えに密接にかかわっている<sup>(2)</sup>。本稿では、言語と境界に関わる問題群のうち、言語の境界をこえる異言語間コミュニケーション方略の一つとしての「言語混合」に注目する。ここで言う言語混合とは、「少なくとも二つの異なる言語からの形態・統語的、また(は)語彙的な素材が顕著にみられるような話し方」<sup>(3)</sup>としての混合コード(mixed codes)を使う方略を指す。混合コードは、言語接触に伴う基本的な現象であり、多くの研究が行われてきたが<sup>(4)</sup>、異言語話者間の接触場面において言語を混ぜて用いる方略としての言語混合は、これまで、異言語間コミュニケーション方略としては、他手段との関係のなかで十分に位置づけられてこなかった。本稿では、異言語間コミュニケーション方略としての言語混合の意義を明らかにするために、諸方略のなかでの位置づけを確認したうえで、その特徴を具体的な事例に基づいて考察する。

とりあげる事例は、ドイツ・ポーランド国境地域である。第二次世界大戦後に新しくひかれ、「オーダー・ナイセ線」として知られるこの国境には、長い歴史を持つ言語境界地域

(1) 本稿は2019年8月に札幌で開催されたアジア・ゲルマニスト会議における発表に基づいて加筆修正したものである。より言語的な分析に焦点をあてた短縮版はGoro Christoph Kimura, „Sprachmischung als Strategie der Grenzüberwindung: Beispiele aus der deutsch-polnischen Grenzregion“, Yoshiyuki Muroi, HG., *Einheit in der Vielfalt? Tagungsband der Asiatischen Germanistentagung 2019* (München: iudicium, 2020), S.832-840。

(2) 木村護郎クリストフ「境界研究へのアプローチとしての言語管理：中央ヨーロッパ国境地域の事例から」『境界研究』9号、2019年、47-58頁。スラヴ語圏に関する諸事例はTomasz Kamusella, Motoki Nomachi & Catherine Gibson, eds., *The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016)を参照。

(3) 原文“a way of speaking which shows evidence of substantial amount of morpho-syntactic and/or lexical material from at least two different languages.” (Peter Muysken, “Mixed codes,” Peter Auer & Li Wei, eds., *Handbook of Multilingualism and Multilingual Communication* (Berlin & New York: Mouton de Gruyter, 2007), pp. 315-339, p. 315.) 翻訳は筆者(以下同)。

(4) Jeroen Darquennes, Joseph C. Salmons & Wim Vandenbussche, eds., *Language Contact: An International Handbook*, Vol.1 (Berlin: De Gruyter Mouton, 2019)。

で見られるような、住民が相手側の言語をも話す「境界バイリンガリズム」が存在せず、ヨーロッパで最も言語的に断絶された国境と言われた。しかし、ヨーロッパ統合の流れの中で近年、急速に国境をこえた交流が増加し、日常化している<sup>(5)</sup>。そのようななかで言語混合が新たに発生する場合、この方略が用いられる意義が明確に表れることが期待できる。具体的には、国境線の中ほどに位置するフランクフルト・アン・デア・オーダー／スウビツェ両市において2012年から2014年にかけて行った参与観察とインタビューによる調査結果が中心となる<sup>(6)</sup>。同地域における言語混合に関する先行研究としては、ドイツ側の教育機関に通うポーランド人生徒の言語使用にみられる言語混合を、「持続性」(durability)、「透過性」(permeability)、「境域性」(liminality)という境界現象の三つの観点から分析したロボーデスの研究<sup>(7)</sup>があるが、ポーランド人同士の言語使用を扱っており、異言語間コミュニケーションに関するものではない。またポーランド側の国境沿いの路上や市場でドイツ人と意思疎通をはかる際のポーランド人の言語使用をとりあげたヤンチャクの調査では言語混合も部分的にとりあげられているが<sup>(8)</sup>、こちらもポーランド人の言語使用にのみ焦点をあてている。それに対して本稿では、調査地域におけるドイツ人による使用も含めた異言語間コミュニケーションの手段としての言語混合を総合的に考察することをめざす。

## 1. 異言語間コミュニケーションの諸手段の中の言語混合

まず、言語混合を、異言語間コミュニケーションの諸方略の中に位置づける。筆者はこ

---

(5) 国境地域の変遷と現状については、Dagmara Jajeśniak-Quast, „B/ORDER IN MOTION: The German-Polish Border from the System Transformation until the Present-Day European Integration,” *Eurasia Border Review* 8 (2017), pp. 31–44.

(6) 調査に際しては、キャノン・ヨーロッパ財団(Canon Foundation in Europe)の助成を受けた。諸方略の概観は Kimura, Goro Christoph, „Strategie komunikacji transgranicznej: perspektywa polsko-niemiecka a sytuacja w Japonii,” *Język. Komunikacja. Informacja* 14 (2019), s. 85–101; „Interlinguale Strategien im Vergleich: allgemeine Eigenschaften und deutsch-polnische Anwendungen,” Cyril Robert Brosch & Sabine Fiedler, Hg., *Jahrbuch der Gesellschaft für Interlinguistik* (Leipzig: Leipziger Universitätsverlag, 2019), S. 43–57; “Alternative interlingual strategies for crossing linguistic borders: Theoretical possibilities and their realization at the German-Polish border,” Barbara Alicja Jańczak, ed., *Language Contact and Language Policies Across Borders: Construction and Deconstruction of Transnational and Transcultural Spaces* (Berlin: Logos, 2018), pp. 73–88; “Signs of De-territorialization?: Linguistic Landscape at the German-Polish Border,” *Eurasia Border Review* 8 (2017), pp. 45–58.

(7) Dagna Zinkhahn Rhobodes, *Sprechen entlang der Oder: Der Charakter der sprachlichen Grenzen am Beispiel der deutsch-polnischen Sprachroutine* (Frankfurt am Main et al.: Peter Lang, 2016).

(8) Barbara A. Jańczak, „Linguistische „Grenzschafte“: Kommunikationsstrategien in der deutsch-polnischen Grenzregion am Beispiel von Bewohnern der polnischen Städte Zgorzelec und Łęknica,” Britta Hufeisen et al., Hg., *Sprachbildung und Sprachkontakt im deutsch-polnischen Kontext* (Berlin: Peter Lang, 2018), S. 189–217; “Borderlands as Spaces of Transition. The Communication of Polish Vendors in the German-Polish Border Region by the Example of Forms of Address,” Barbara A. Jańczak, ed., *Language Contact and Language Policies Across Borders* (Berlin: Logos, 2018), pp. 89–103.

れまでに、異言語間コミュニケーションの方略を使用言語の種類によって網羅的に分類する枠組みを提案した。その枠組みでは、使用言語は、当事者との関係によって三種類に分けられる。まず、コミュニケーション当事者の言語(当事者言語)として、母語(話し手自身がもっとも慣れ親しんできた言語、第一言語)と相手言語(話し相手がふだん用いる言語)がある。それに対して、当事者のどちらの母語でもない言語(追加言語)を異言語コミュニケーションのために用いる場合がある。これらの組み合わせ可能性の理念型を表したのが表1である。大きく分けて、当事者言語使用、追加言語使用、当事者言語と追加言語の組み合わせ、言語混合の四種類に分けられる。実際にはこれらの言語の種類およびその組み合わせは明確に判別・特定できない場合があるが、大まかな分類基準として理解されたい。

表1 異言語間コミュニケーションの諸方略<sup>(9)</sup>

		当事者言語		追加言語(A)	言語混合(N/P/A)
		母語(N)	相手言語(P)		
当事者言語	母語(N)	I 母語の相互使用(N+N)			
	相手言語(P)	II 単一の当事者言語(N=P)	III 相手言語の相互使用(P+P)		
追加言語(A)		VI 母語／追加言語(N+A)	VII 相手言語／追加言語(A+P)	IV 単一の共通語(A)	
		VIII 母語／相手言語／追加言語(N+P+A)		V 複数の共通語(A+A)	
言語混合(N/P/A)		IX 一方的な言語混合		X 相互的な言語混合	

順に見ていこう。当事者言語使用には三つの可能性がある。まずそれぞれが自らの母語を使う場合である(I)。これは一般には相手の発言を理解する言語能力を必要とするため、受容的多言語使用とも呼ばれる。間に通訳などの言語的仲介を入れる場合は、間接的なコミュニケーションになる。次に、いずれかの母語(他の参加者にとっては相手言語)をみなが使用する場合がある(II)。そして、みながいずれかの相手言語を使用するが、誰も

(8) Kimura, „Interlinguale Strategien im Vergleich...“に基づいて一部変更。

自分の母語を使わない場合がある(Ⅲ)。一方、追加言語使用としては、単一の共通語(リング・フランカ)を使う場合(Ⅳ)が一般的であるが、それぞれが異なる追加言語を使う場合も考えうる(Ⅴ)。そのほか当事者言語と追加言語を併用する場合としては、一方が母語を、他方が追加言語を用いる場合(Ⅵ)と、一方が相手言語、他方が追加言語を使う場合が想定できる(Ⅶ)。三人以上がそれぞれの当事者言語と追加言語の能力を持っている場合は、三種類全てが用いられる可能性(Ⅷ)も、可能性としては考えうる。

以上の各方略がいずれも個々の当事者が三種類のいずれかの言語を使用することを前提にしているのに対して、単一の当事者が当事者言語と追加言語のうち複数の種類の言語を用いるのが言語混合である。言語混合は、その場に参加する当事者の一部が言語を混ぜて使用し、別の当事者が、当事者言語あるいは追加言語を用いる一方的な場合(Ⅸ)と当事者全てが言語を混ぜる相互的な場合(Ⅹ)がありうる。

これらの諸方略はいずれも異なる長所と短所をもつが、言語混合は、Ⅰ～Ⅳの方略と同様、積極的な支持・推進の見解がみられる方略である<sup>(10)</sup>。例えばミュールホイスラーは、世界各地でみられるピジンのような混合言語による異言語間の媒介を、文化的に中立で適用力の高い方法として評価する<sup>(11)</sup>。しかし均質な言語が追求された言語的な近代化の過程で、言語混合は望ましくないこととされてきた。異言語間コミュニケーションを扱う媒介言語論の文脈では、当事者言語を使うか追加言語を使うかに関する議論が主な論点であり<sup>(12)</sup>、異言語コミュニケーション方略の一覧をとりあげた諸研究の比較検討では、言語混合が必ずしも考慮されていないことが示された<sup>(13)</sup>。

ただし、依然として「純粋な言語」のイデオロギーは根強いものの、近年では混質性(ハイブリディティ)が肯定的に評価されるなど、言語混合を見直す動きがみられる<sup>(14)</sup>。均質

(10) 各方略の推進者による論拠は、木村護郎クリストフ、渡辺克義編『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社、2009年および注6の諸文献参照。ⅤからⅧについては、使用例は報告されているものの、これらの方略を支持する論は管見の限り、みられない。

(11) Peter Mühlhäusler, "Pidginization," Hans Goebel et al., eds., *Kontaktlinguistik / Contact Linguistics / Linguistique de contact: Ein internationales Handbuch zur Wissenschaft von Sprache und Gesellschaft / An International Handbook of the Science of Language and Society*, Vol. 12 (1. Teilband) (Berlin & New York: de Gruyter, 1997), S. 642–649.

(12) 木村護郎クリストフ『節英のすすめ：脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』萬書房、2016年参照。

(13) Kimura, Goro Christoph, „Eine Typologie interlingualer Kommunikationsmöglichkeiten,“ Sabine Fiedler & Cyril Brosch, Hg., *Florilegium Interlinguisticum. Festschrift für Detlev Blanke zum 70. Geburtstag* (Frankfurt am Main et al.: Peter Lang, 2011), S. 29–46. Anthony Pym, "Introduction: Why mediation strategies are important," *Language Problems & Language Planning* 42 no.3 (Special issue "Mediation Strategies") (2018), pp. 255–266 も言語混合は考察に含めていない。

(14) „Insgesamt ist Hybridität ein kulturelles Paradigma im Aufbruch und bietet eine zeitgemäße Alternative zum nationalphilologischen Paradigma. Ihre Etablierung ist jedoch nicht ganz einfach, zumal das Konzept von Reinheit als tiefstzende Ideologem anscheinend selbstverständlicher ist“ (Csaba Földes, „Deutsch im (ost-)mitteleuropäischen

な言語をめざす動きがとりわけ強くみられてきたヨーロッパにおいても、中世においては言語混合は有効な手段として広く用いられていたことが指摘され<sup>(15)</sup>、現代に関しても、言語混合の再評価がみられる。ヨーロッパにおける異言語間コミュニケーション方略の一つとして「コード切り替え(コードスイッチング)」(発話の過程で言語を切り替えること)をとりあげるボックスらは、コード切り替えが公式的(formal)な場では忌避されてきたものの日常のなかでは頻繁に見られることを指摘し、コード切り替えをより高く評価して他の手段と同等の価値を認めるべきだと主張する<sup>(16)</sup>。ベルトウーらも、次のように主張する。

コミュニケーションをとることが最終的に重要であり、それが効率的であるとともに公正でもあるべきならば、話者が言語を混ぜたり組み合わせたりして使用することを認めることが有意義である場面は多い。これは既に実践されていることであるが、それ自体を有効な方略として認めることで、実践はより効果的になりうる<sup>(17)</sup>。

このような提言を含む再評価の流れの中で、欧州評議会の『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(CEFR)の増補版は、「さまざまな言語を混ぜ、必要に応じて切り替える」能力を複言語・複文化能力の一環として加えた<sup>(18)</sup>。

しかし言語混合への批判的な見方もみられる。マラーチは、言語混合は必然的に標準的

---

Areal. Zwischen kultureller Koexistenz und sprachlicher Symbiose,“ Mariana-Virginia Lăzărescu, Hg., *Deutsch als Fremd- und Muttersprache im mitteleuropäischen Raum* (Berlin: Wissenschaftlicher Verlag, 2014), S. 87–117, S. 110).

(15) “Language mixtures with hybrid character were not obstacles to good intelligibility – on the contrary, they were to increase intelligibility in a multilingual community” (Oliviere Moliner, Ulrike Vogel & Matthias Hüning, “Europe’s multilingualism in the context of a European Culture of standard languages,” Anne-Claude Berthoud, François Grin & Georges Lüdi, eds., *Exploring the Dynamics of Multilingualism. The DYLAN project* (Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 2013), pp. 407–428, p. 417).

(16) “We propose that an upgrade of the appreciation of codeswitching (...) is useful.” (Ad Backus, László Marácz & Jan D. ten Thije, “A Toolkit for Multilingual Communication in Europe: Dealing with Linguistic Diversity,” J. Normann Jørgensen, ed., *A Toolkit for Transnational Communication in Europe* (Copenhagen: University of Copenhagen, Faculty of Humanities, 2011), pp. 5–24, p. 19); “It [code-switching] is a linguistic tool on a par with all other tools.” (Ad Backus & J. Norman Jørgensen, “Code-Switching,” Jørgensen, ed., *A Toolkit...* pp. 25–42, p. 38). なお、言語はそもそも混合的であるためコード切り替えという概念が必要かという疑問に対して、ボックスらは、社会的構築物としての「言語」意識が存在し、言語混合がそのように認識される以上、この概念は有効であるとしている (ibid.)。

(17) “if communication is what ultimately matters, both the terms of its efficiency and its fairness, there are many situations where it can benefit from allowing languages to mix and combine in speakers’ practices. This already occurs in practice, but the practice may become more effective if it is recognized as an intrinsically valid strategy.” (Anne-Claude Berthoud, François Grin & Georges Lüdi, “Conclusion,” Berthoud, Grin & Lüdi, eds., *Exploring the Dynamics of Multilingualism...*, pp. 429–435, p. 431)

(18) “blending and alternating between languages where necessary.” (Council of Europe, ed., *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment. Companion Volume* (Strasbourg: Council of Europe, 2020), p. 127)

な話し方から外れる「不完全な多言語使用」(incomplete multilingualism)となるので、少しでも公式的なコミュニケーションの文脈では受け入れられないとして、言語混合の公認を求めることは非現実的だとする<sup>(19)</sup>。

以上のように、言語混合は、世界各地で広く用いられてきたにもかかわらず、異言語間コミュニケーション手段として他の方略との関係で明確に位置づけられているとはいえない。とりわけヨーロッパのように言語の均質性が標準とされる社会的文脈においては、異言語間コミュニケーション手段の中で周辺的な位置づけにあるといえよう。本稿では、現代のヨーロッパの文脈のなかでも、言語混合が存在しない状況から出発した地域において言語混合がどのように展開しているかを検討することで、言語混合の可能性を探る一助としたい。

## 2. 言語混合の形式と機能

異言語コミュニケーション方略として言語混合を考察するためには、どのような言語混合がどのようなコミュニケーションにおいてどのような機能をもって用いられているかを把握することが必要である。そこで、次に実際の事例で言語混合を検討するための前提として、言語混合の形式、それが用いられる言語行動のレベルおよび機能の種類をあげる。

表2 言語混合のタイプ<sup>(20)</sup>

形式		説明
コード切り替え	交互的	その場限りの話し手の判断。時点ごとに特定言語が優先されて交互に使われる。通常、統語論的な句の境界(syntactic clause boundary)で切り替わる。
	挿入的	その場限りの話し手の判断。基調として用いられる言語は維持される。句より小さい単位で挿入が行われる。
コード混合	交互的	繰り返しみられるパターン。句より小さい単位でも言語が混合する。どちらの言語が基調(matrix language)か判別がつかない。
	挿入的	繰り返しみられるパターン。基調として用いられる言語は維持される。挿入部はしばしば基調言語の文法にあわせて変形される。
混合語		話し手の選択による変異が減り、話し手が従う構造的な規則性がみられる。

(19) László Marác, "Languages, norms and power in a globalized context," Peter A. Kraus & François Grin, eds., *The Politics of Multilingualism. Europeanisation, globalization and linguistic governance* (Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 2018), pp. 223–243, p. 238.

(20) Peter Auer, "From code-switching via language mixing to fused lects: toward a dynamic typology of bilingual speech," *International Journal of Bilingualism* 3 no. 4 (1999), pp. 309–332をもとに作成。

言語混合の際に複数言語の要素がつながる形式は、言語間の区別意識が明確かつその場限りの「コード切り替え」(code-switching)から、同様なパターンが繰り返し起こって結びつきがより緊密になる「コード混合」(code-mixing)を経て、独自の規則性がみられる混成語(fused lects)に至る連続体として理解できる(表2)。区分は必ずしも明確なものではない。

言語混合がみられる言語行動の区分としては、言語混合を明示的に含むCEFRの複言語・複文化能力のレベル別の能力記述文が指標となる。この区分も実際は連続的である。

表3 言語混合に関する能力記述文(抄訳)<sup>(21)</sup>

レベル	能力記述文
C2	多言語の文脈において、専門的、抽象的な主題に関する相互行為において柔軟に言語を切り替えることができる。
C1	多言語の文脈におけるコミュニケーションを容易にするために、相手に合わせて柔軟に言語を切り替えて会話に加わり、また議論における発言や文書について要約してコメントできる。
B2	協力的な相互行為において、課題や進行、決定すべきことや予想される結果などを言語を切り替えて説明できる。
B1	日常的な文脈で、複数言語の限られた能力を創造的に発揮して対応できる。
A2	簡単で実地的な情報伝達のために他言語から単語や文を用いることができる。
A1	きわめて基本的な日常の出来事において協力的な相手の助けを借りて複数言語で用を足すことができる。

機能的な側面では、言語の基本的な社会的機能としての実用的な機能と象徴的な機能が言語混合についても想定できる。例えば、南米のポルトガル語圏とスペイン語圏の境界地域(ブラジル・ウルグアイ国境など)におけるポルトニョル(Portuñol)と呼ばれる両言語の混合は、実用的な意味合いを持つのみならず、「両方の言語圏および共同体につながる意識を持つ人にとっては(...)両言語の要素を言明において混ぜることは混質的なアイデンティティの表現となる」<sup>(22)</sup>ことで象徴性を帯びることが指摘されている。

以下では、これらの分類基準を参照して考察する。なお、本稿では言語間の組み合わせのみが考察の焦点であるため、会話等の転写は該当言語の正書法を用い、簡易化している。

(21) Council of Europe, ed., *Common European Framework ...*, p. 128をもとに作成。

(22) „für diejenigen, die sich beiden Sprachräumen und Sprachgemeinschaften verbunden fühlen, (...) die Vermischung von Elementen beider Sprachen in ihren Äußerungen zu einem bewussten Ausdruck ihrer hybriden Identität.“ (Elmar Eggert, „Verwendungsweisen und Bewertungen der „Mischsprachen“ *Spanglish und Portuñol*“, Thorsten Burkard & Markus Hundt, Hg., *Sprachmischung – Mischsprachen. Vom Nutzen und Nachteil gegenseitiger Sprachbeeinflussung* (Berlin: Peter Lang, 2018), S. 15–37, S. 24)

### 3. ポーランド側における路上・市場での言語混合

ヤンチャクの調査によれば、国境のポーランド側でポーランド人がドイツ語で話しかけられた場面において、ドイツ語で答える場合とポーランド語で応対する場合の他、言語混合もみられる。次の例では、ドイツ語で答えようとしているが、ポーランド語の単語が入っている。ここで„Restaurant“は、ポーランド語の„restauracja“ (レストラン)をドイツ語風に言おうとしたものと考えられる(正確なドイツ語はRestaurant)。

例1 路上での言語混合<sup>(23)</sup> (以下、ポーランド語は下線、ドイツ語はイタリック)

*Bitte fahren Sie na links i geradeaus. geradeaus i na links*

どうぞ 行く あなた に 左 そして まっすぐ まっすぐ そして に 左

*Restaurant schreiben (...) To jest drei, vierzig eh vier eh vier hunde vierhunde Meta*

レストラン 書く それは 3 40 えー 4 えー 4 ひゃ<sup>(24)</sup> 4ひゃ メタ

訳：左に曲がってからまっすぐ行ってください。まっすぐ行くと左にレストランと書いてあります。それは3、40、400メートルです。

このような路上での言語混合は、いわば急場しのぎとしてその場で生み出されたものである。それに対して、ドイツ人の客を目当てに国境沿いに設けられたいわゆる「国境市場」(ドイツ側での俗称は「ポーランド市場」)では言語混合がもっとも広く用いられる方略である。店員がドイツ人の顧客にできるかぎりのドイツ語の単語や表現を入れて話しかける場合、同じような表現のパターンが繰り返し見られ、言語混合がある程度、慣用化する例もみられる。その際、次の例のように、文内(2-1, 2-2)や語内(2-3, 4, 5, 6)のレベルの混合がみられる。

例2 市場での言語混合<sup>(25)</sup>

2-1 *Chcesz auch probieren Schinken? Nie, ja? No bitte!*

君はしたい も 試す ハム いや はい じゃ どうぞ

訳：ハムも試したい？ いいえ？ はい？ じゃ、どうぞ。

2-2 *A Junge! Bo dla Mädchen to sa jeszcze takie Pupy (...)*

そして 男子 だって のために 女子 それ ある まだ こんな 人形

*Das ist takie gut, gucken!*

これは である こんなに よい 見る

訳：それで、男の子。女の子にはこんな人形もある。これはこんなにいい、見ること。

2-3 *Fraueczka* ドイツ語 *Frau* (女性)+ポーランド語指小辞女性形 *-eczka* = 女の子

2-4 *Käseschineczken* ドイツ語 *Käseschinken* (チーズハム)にポーランド語指小辞 *-eczka* 挿入 = チーズをのせたハムをひと切れ(?)

(23) Jańczak, „Linguistische „Grenzschafte“ ...,“ S. 210–211.

(24) ドイツ語の *hundert* (百)の末部を発音していないため、「ひゃく」の最後を抜いた「ひゃ」とした。

(25) Jańczak, „Borderlands as Spaces of Transition ...,“ p. 95–98.



- 2-5 *Zigaretki* ドイツ語 *Zigarette* + ポーランド語指小辞複数形 *-ki*  
 2-6 *Kropchen* ポーランド語 *kropki* (水玉模様) + ドイツ語指小辞 *-chen*

路上での例が、概ね形式的にはドイツ語の文にポーランド語が加わる挿入的なコード切り替えであるのに対して、市場の例は、両言語がより密接に絡み合うコード混合といえる。個別には挿入的といえるが、2-2のように文によって基調言語が交代する場合もあり、交互的な面も強い。ただしヤンチャクによれば、慣用化が進んでいるとはいえ、文法的な規則性がみられるわけではないので、市場の言語使用は混合言語 (*Mischsprache*) とはいえない<sup>(26)</sup>。

言語行動としては、いずれも、意図的というよりは、ドイツ語を話そうとするものの言語能力の不足で言語混合がおこると考えられる。レベル的には、これらの言語混合は、日常的な実際の場面に限られるため、A1からB1に分布するといえよう。両言語が飛び交う「国境市場」という場を指標する象徴的な意味が加わることも考えられるが、基本的には実用的な機能が前面に出ているといえよう。ポーランド語を学んでいない大多数のドイツ人にはポーランド語の単語は理解されないと考えられるので、ここでのポーランド語の要素は、意味を伝えるというよりは、発話の流れを止めないための潤滑油的な、あるいは気持ちをこめる役割を果たしているといえる。

#### 4. 越境協力における言語混合

これらのヤンチャクの事例は、ポーランド人による日常的なレベルにおけるコード切り替えからコード混合にわたる言語混合であったが、ドイツ人による、より高度なレベルでの、またより混合語に近い言語混合はみられるだろうか。筆者の現地調査をもとにみていきたい。調査地域ではポーランドの方がドイツ語を学んだ経験がある人が多いため、言語混合の事例はポーランド人の方が多いが、筆者の調査では、越境協力の場などでポーランド人と密接にかかわることが多いドイツ人による言語混合がみられた<sup>(27)</sup>。

##### 4.1 ドイツ・ポーランド青年オーケストラ

はじめにとりあげるのは、比較的ゆるやかなペースの越境協力の例である、ドイツとポーランドの若者が一緒に演奏するドイツ・ポーランド青年オーケストラである。同オーケストラは、演奏会に向けて合同練習をする際に集まる。構成員への聞き取りによれば、ポーランド人団員は基本的にドイツ語がある程度できるのに対して、ドイツ人の方でポーラ

(26) Jańczak, "Borderlands as Spaces of Transition ...," p. 100.

(27) 非対称的な言語学習状況のため、ヤンチャクの調査とは逆の事例、すなわちドイツ側の路上や市場でドイツ人がポーランド語で話しかけられることは基本的に想定できない。

ンド語ができる人はほとんどいないとのことであった(2013年4月14日)。これは、ポーランド側では学校でドイツ語が学ばれる場合が多いのに対してドイツ側ではポーランド語学習が一部に限られるという、地域の言語事情を反映している。オーケストラにおいては、団員間の言語コミュニケーションがなくとも協力して演奏できるのが特徴であり、合同練習において主に話すのは指揮者であった。ここでは指揮者の言語使用に注目する。指揮者はドイツ人とポーランド人の指揮者がおり、分担して練習・公演を担当している。いずれも言語使用のパターンは類似していた。すなわち主にドイツ語を用い、ポーランド語や英語を交えて話していた。ここでは、ドイツ人の指揮者の言語使用をとりあげる。この指揮者は、本人への聞き取りによれば、少ししかポーランド語ができないということであったが、練習中は、数字をはじめとする簡単なポーランド語の単語や決まった表現を交えて指導をしていた。

例3 練習のときの指示(2013年4月13日)(太字英語、傍点イタリア語)

3-1 *Bratsche* **always forte**. *Piano* <sup>.....</sup> *existiert nicht*. ... **I am sorry**. *Przepraszam*.

ビオラ いつも フォルテ ピアノ 存在 しない 申し訳ない 申し訳ない

訳：ビオラはいつもフォルテ。ピアノは[この部分には]ない。申し訳ない。申し訳ない。

3-2 *Das muss* <sup>.....</sup> *fortissimo*, *das ganze Orchester*, **as much as you can**. *Jeszcze raz*.

これ 必要だ フォルティシモ この 全 オーケストラ できるだけ もう一度

訳：ここはフォルティシモ、オーケストラ全体で、できるかぎり。ではもう一回。

3-3 *Vier Takte und dann kein Auftakt*, **no przedtakt**, **sondern directly dwa pięć sześć**.

4 拍 そして それからなし 弱起 なし 弱起 ではなく 直接 2 5 6

訳：4拍で、それから弱起ではなく、直接、2、5、6

ここでは、音楽用語のイタリア語を含めて四言語が登場する。ドイツ語が基調であり、ポーランド語や英語が補助的に用いられる。その意味では挿入的なコード切り替えといえるが、これらの例では、ポーランド語は、数字や決まった文言が句や文の末尾に追加的におかれ、英語がいわばドイツ語とポーランド語のつなぎとなっている。その意味で、交互的な要素も強い。類似するパターンが繰り返されるという意味ではコード混合ともいえるが、複数の人に共有された話し方ではなく、この指揮者のいわば個人方略だろう<sup>(28)</sup>。

レベル的には、限られた要素ながらきわめて効果的に用いられ、A2からB1といえる。とりわけ興味深いのが機能的な側面である。構成員の母語であるドイツ語とポーランド語に中立的な音楽用語(イタリア語)や英語を交えることで、複数の言語で同じ内容を繰り返すことなく効率的に理解の共有が促されるという実用的な要素と、どちらの言語を母語とする団員も直接話しかけられていると感ずることができるという象徴的な要素が合わさっ

(28) ポーランド人の指揮者の場合、より自由に両言語を操るので、このような固定的なパターンはみられなかった。

て、全体として双方の尊重と一体感が醸成されると考えられる。これはどれか一つの言語だけを使っては不可能な、言語混合ならではの効果といえる。

#### 4.2 越境協力組織

時折合同練習を行うオーケストラに比べて、日常的にドイツ人とポーランド人が緊密に協働する組織が、フランクフルトとスウビツェの協力を担う、両市役所合同の部署「フランクフルト・スウビツェ協力センター」である。センターでは、職員全員が高度なドイツ語とポーランド語の運用能力を持っている。センター長(ドイツ人)によれば、「どちらの言語を話してもかまわないというのがみな共通理解です<sup>(29)</sup>。」

ここでは、毎年5月に行われる、ポーランドのEU加盟を記念する「ヨーロッパの日」の行事をふり返ることなどを議題としたセンターの定例会議の例をあげる。この会議では、センターに務めるドイツ人二名とポーランド人四名が出席し、一つのテーブルを囲んで話し合いを行った。出席者のうちドイツ人一名とポーランド人二名は主にそれぞれの母語で話したのに対して、もう一名のドイツ人(センター長)と二名のポーランド人は頻繁に言語を切り替えた。コミュニケーションにおいては部分的にそれぞれが母語を話す受容的多言語使用がみられたが<sup>(30)</sup>、一貫して母語のみを話す人はおらず、しばしばコード切り替えがみられた。全体としては、参加者の言語比率に対応してポーランド語使用が優勢であったものの、言語混合が主な方略であった。

コード切り替えは、主に句や文の区切りで起こる交代型であった。交代が起こるきっかけとしては次の三つの場合がみられた。(1)話題転換。これはコード切り替えが話題の転換を表すものである。(2)より詳しい説明が必要なとき。そのような場合、話し手の母語への切り替えが起きた。両言語の高度な運用力をもつセンター職員の間でも、より洗練された表現は母語の方が都合がよいと考えられる。(3)主に母語を使うドイツ人やポーランド人が発言するとき。その後は他の参加者も同じ言語で続けることが多かった。下記の括弧内の数字は、コード切り替えのきっかけの種類を表す。

これらの要素は、会議の冒頭でのセンター長の発言においてまとめて明確に表れている(例4)。傍聴者として筆者をドイツ語で紹介した後、ポーランド語に切り替えて議題に入り(1)、出来事を振り返ったあと自身の意見を説明するところでドイツ語に切り替えている(1,2)。それに対して、ポーランド語を主に話す出席者がポーランド語でコメントを述べ

(29) „Wir sprechen alle Deutsch und Polnisch (...) jeder weiß, es ist völlig egal in welcher Sprache ich spreche.“ (2013年4月2日、インタビュー)

(30) Kimura, Goro Christoph, „Rezeptive Zweisprachigkeit in der deutsch-polnischen Grenzregion,“ Hufeisen et al., Hg., *Sprachbildung und Sprachkontakt ...*, S. 219–240では、受容的多言語使用は、双方に中程度の言語能力がみられる場合にもっとも効果が高いことが示された。本センターの場合、言語能力が高いので、相手言語の受容的な使用に留まらないと考えられる。

て(3)、センター長もそのままポーランド語で応答したが、マイナス面についても考えようという話題転換でドイツ語に切り替えている(2)。それに対して再び同じポーランド人が発言し(3)、ポーランド語でセンター長が応答した後、しばらくポーランド語で話したが、自身の考えの理由を述べるところで、文の途中でドイツ語に切り替えた(2)。

例4 (D: ドイツ人、P: ポーランド人)

D: [ドイツ語で、筆者を紹介した後、]

(1) Ok, zaczynamy od dnia Europy. Proponuję tak, żebyśmy zbierali wszystkie plusy i minusy (...)

(1)(2) Ich denke, das ganze Szenario (...) [自身の見解を述べる]

P: (3) [ポーランド語でコメント]

D: Czyli, to wszystko (...) znacznie na plus. (...)

(1) Wie die ganzen Veranstaltungen dann gelaufen sind (...) Was nicht gut funktioniert hat, ist (...)

P: (3) Na początku.

D: Na samym początku. (...) Ja uważam, że tutaj, w tej sytuacji, mieliśmy bardzo dużo szczęścia, że nie doszło do większych, (2) no Protesten, Irritationen, aus dem Grunde, (...)

訳

D: [ドイツ語で、筆者を紹介した後、]

(1)では、ヨーロッパの日から始めましょう。よかった点をよくなかった点をあげることを提案します。(...)

(1)(2) 進行全体としては (...)[自身の見解を述べる]

P: (3) [ポーランド語でコメント]

D: すなわち、それはすべて (...)よかったことといえます。(...)

(1) それから諸行事全体がどのように進行したか (...) うまくいかなかったことは (...)

P: (3) はじめは。

D: はじめから。 (...) 私が思うに、この状況では、大きな、(2) えー、抗議や混乱が起こらなかったのは運がよかったです。その理由は (...)

言語行動のレベルとしては、行事のふり返りと課題の抽出という、やや高度な議論が行われており、B2からC1に分類できる。機能的には、話題転換の表示や母語使用および直前の発話者と同じ言語での応答といった点は、コミュニケーションの円滑化に寄与する実用的な側面といえる。と同時に、象徴的な機能としては、どちらか一方の言語を会議の基調言語としない形で両言語のバランスをとり、対等性を表現することで、両市の対等な関係構築をうたうセンターの姿勢を示しているともいえる。

#### 4.3 越境的社会芸術「ノヴァ・アメリカ」

最後に、混合語をめざす取り組みとして「ノヴァ・アメリカ語」をとりあげる。これは、

二つの国に分断されているオーダー・ナイセ川の両側をあわせて一つの地域としてとらえようという社会芸術プロジェクト「ノヴァ・アメリカ」(新アメリカ)の一環として創出されたものである。この企画は、1999年に始められた、フランクフルトとスウビツェ両市を単一の町としてとらえようとする「スウプフルト」(Slubfurt)運動から派生して、この発想を国境地域全域に広げようとするものである。背景を含めて説明する必要があることと、意図的な言語混合として特筆すべき試みであることから、少し長めにとりあげる。

この一見なぞめいた名称は、かつて、この地域を支配したプロイセン王国のフリードリヒ大王が、アメリカに移民するよりもここへ、とオーダー川流域を干拓して移住者を招いたことに由来する。干拓地には、HampshireやPennsylvania、Jamaikaといった名前の村々がつくられたという。21世紀の「ノヴァ・アメリカ」プロジェクトは、こういった歴史を再解釈して経済、文化、教育などさまざまな国境をこえた活動のネットワーク化による地域の活性化をめざしている。この命名は、ドイツ統一後、人口減少が続く旧東ドイツの地域にあって、西に行くのではなくここにとどまろう、ここぞ新天地なり、と宣言しているようにみえる。提唱者の芸術家ミヒャエル・クルツヴェリは、ノヴァ・アメリカについて次のように述べる。

こちら側はドイツ人、あちら側はポーランド人、ということは私たちのところでは、もはやないのです。私たちはノヴァ・アメリカ人であり、元ポーランド人、元ドイツ人その他の背景を持つ移民なのです。この中間地域に、新しい地域を創設し、国民国家に基づく二つの社会の間の相克を止揚するのです<sup>(31)</sup>。

国境の両側を隔てることもできればつなぐこともできる主要な要素として、言語はこの企画において実用面でも象徴面でも大きな役割を果たしている。この企画の紹介文では導入の後、まず言語に言及される。

ノヴァ・アメリカは考えて、夢を見て、発見するための空間です。よってここでは新しい言語が生まれています。スウプフルト語／ノヴァ・アメリカ語、すなわちドイツ語とポーランド語のジンテーゼ[総合]であり、時には他の言語も加わります<sup>(32)</sup>。

(31) „Hier die Deutschen, dort die Polen, das gibt es nicht mehr bei uns. Wir sind Nowo-Amerikanerinnen und Nowo-Amerikaner mit post-polnischem, post-deutschen und vielen weiteren Migrationshintergründen. Wir haben einen neuen Raum im Zwischenraum gegründet, der die Dialektik zwischen zwei nationalstaatlichen Gesellschaften aufhebt.“ (Michael Kurzwelly, red., *Nowa Amerika. Ein Land dazwischen | Kraj pomiędzy* (Slubfurt: Slubfurt e.V., 2014), S. 5)

(32) „Nowa Amerika ist ein Raum zum Denken, Träumen und zum Entdecken. Deswegen bildet sich eine neue Sprache heraus – Slubfurtisch/Nowoamerikanisch – eine Synthese der deutschen und der polnischen Sprache, und manchmal auch anderen Sprachen.“ (Michael Kurzwelly, Koordinator, *Nowa Amerika 2013 (Kalenderz)* (Slubfurt: Slubfurt e.V., 2014), S. 16)

クルツヴェリによれば、「ノヴァ・アメリカ語」のねらいは、言語の壁をユーモアでのりこえるとともに地域共通のアイデンティティをつくりだすことである。ウェブサイトでは、ノヴァ・アメリカの紹介がこの「言語」で記されている。

例5 「ノヴァ・アメリカ」紹介文<sup>(33)</sup>

NOWA AMERIKA wurde auf einem zakonspirowanym Treffen założona w dniu 20. März 2010. (...) Zapraszamy do Entdeckungsreise po naszej „Land“.

訳：ノヴァ・アメリカは、2010年3月20日、ひそやかな会合で結成されました。(…)私たちの「くに」の発見旅行においでください。

ここでは語句単位で交互に言語が混ぜられている。それに対して、「ノヴァ・アメリカ語」の他の文例では両言語を組み合わせた造語もみられる。例えば、国境の両側の行事などの日程が記された2013年の『ノヴァ・アメリカ・カレンダー』には、「前書き」„Vorstep” (ドイツ語 *Vorwort* + ポーランド語 *Wstep*) がノヴァ・アメリカ語、ドイツ語、ポーランド語の三言語で書かれている<sup>(34)</sup>。ここでみられる合成は、市場でみられるような語内の言語混合に刺激を受けたものと考えられる<sup>(35)</sup>。以下、[ ]内はドイツ語とポーランド語の対応する単語。

例6 カレンダー「前書き」より

Der Kalenderz [Kalender + kalendarz] 2013 ma [soll] Ihnen pomóc przy [helfen beim] findowaniu [Finden + znajdowaniu] einen interessujacen [interessanten + interesujacego] szlak [Weg] durch Zeit und przestrzen [Raum] von Nowa Amerika.

訳：この2013年カレンダーは、みなさんがノヴァ・アメリカの時間と空間において興味のもてる道筋を見つけるための手助けとなるべきものです。

カレンダーには、毎月の初めに、三言語による「語彙と表現」欄がある。1月 („Jaczeń“ [Januar + styczeń]) では例えば次のように記されて両言語の合成造語がみられる<sup>(36)</sup>。

例7 「ノヴァ・アメリカ語」文例

7-1 Szczęśliches Neues Rok! [Ein glückliches Neues Jahr! + Szczęśliwego Nowego Roku!]

7-2 Trinkniesz ein glaszek szampekt? [Trinkst du ein Glas Sekt? + Wypijesz kieliszek szampana?]

また会話は例えば次のように記される(2月の文例から)。

(33) <http://www.nowa-amerika.eu/informacjon/en/nowa-amerika/> (2020年8月31日閲覧)。

(34) Michael Kurzwelley, Koordinator, *Nowa Amerika 2013 ...*, S. 3.

(35) カレンダーでは、市場で「ノヴァ・アメリカ語の方言」が話されていると述べている (Michael Kurzwelley, Koordinator, *Nowa Amerika 2013 ...*, S. 36)。

(36) Michael Kurzwelley, Koordinator, *Nowa Amerika 2013 ...*, S. 12. “Trinkniesz” の “n” は由来不明。

## 例8 「ノヴァ・アメリカ語」会話例

*Guten dzień! Möchtest käsenik? – Tjak, gernie. Dankuje!*

[*Guten Tag! Möchtest du Käsekuchen? – Ja, gerne. Danke!]*

[*Dzień dobry! Chcesz sernik? – Tak, chętnie. Dziękuję!*]

訳：こんにちは、チーズケーキはどう？ – うん、よろこんで。ありがとう。

これらの例は、実用的というよりは、一体性を創り出すという象徴的機能の方が大きいといえるが、とりわけ象徴性が高いのが、地名である。ポーランドには、戦後ポーランド領となった地名のポーランド語への改名にも関わった国立の地名委員会(Komisja Ustalania Nazw Miejscowości)<sup>(37)</sup>があるが、地名の国語化による地域の国民国家への統合をめざすこの委員会に対して、越境的なアイデンティティをめざす「ノヴァ・アメリカ地域における改名委員会」を設けて改名を行うとして、実際に活動では次のような地名を用いている。

## 例9 「ノヴァ・アメリカ」の地名

*Ślubfurt [Ślubice + Frankfurt], Szczettin [Stettin + Szczecin], Zgörzelic [Görlitz + Zgorzelec], Las Forst [Las + Forst]<sup>(38)</sup>, Odera [Oder + Odra], Nyße [Neiße + Nysa]*

では、ノヴァ・アメリカ語ほどの程度実際に使われているのか。「現実構築」をうたうこの社会芸術にはこれまで芸術家などの文化人のほか学生や関心を持つ市民が参加しており、会合は原則として二言語で、たいていは通訳付きで、参加者の言語的前提によっては受容的多言語使用で行われる<sup>(39)</sup>。口頭で「ノヴァ・アメリカ語」の長めの文を述べるのは事実上、提唱者のクルツヴェリに限られる。それも、あいさつや「ノヴァ・アメリカ」紹介の冒頭部、お礼といった特定の機会に限られ、一種のパフォーマンスの域を出ない。

## 例10 「ノヴァ・アメリカ語」の口頭使用

10-1 „*Sehr szanowni Damen und panowie“ (2013.5.7)*

淑女および紳士のみなさま

10-2 *Sprechamy w beiden językach gleichzeitig. (2013.3.16)*

私たちは二言語同時に話すのです。

10-3 *Dziękuję sehr; und jetzt wünsche ich uns allen smacznego. Dziękuję an den  tłumacz.“ (2013.2.9)*

どうもありがとう、そしてこれからおいしく召し上がれ。通訳もありがとう。

(37) その後、委員会の名称も変わり、現在は Komisja Nazw Miejscowości i Obiektów Fizjograficznych。

(38) ドイツ側にあるこの町は対岸にポーランドの町がなく、ポーランド名がないが、ドイツ語の *Forst* (森) に該当する意味のポーランド語の単語 *las* をつけて、アメリカのラスベガスをもじっている。

(39) Kimura, Goro Christoph, „Rezeptive Zweisprachigkeit ...“

口頭使用の困難は次のような場面からもうかがえる。2012年11月10日に行われた「ノヴァ・アメリカ大会」の開会式において通訳者の到着が遅れたため、提唱者は、„*Guten rano. Unser tłumacz ist noch nicht da. Also zaczynam auf Nowoamerykanisch.*“（おはようございます。通訳者がまだ来ていません。なのでノヴァ・アメリカ語で始めます。）と話し始めたが、参加者から *Das versteht keiner!*（それではだれもわからない）と抗議が出たため、通訳者が来るまで „*Na razie skoczę po prostu. On za chwilę będzie. Also ich mach das erst mal gerade zweisprachig machen, solange bis er da ist.*“（とりあえず私が入ります。彼はまもなく来るでしょう。なので私がとりあえず通訳者が来るまで二言語でやります）と述べて、それ以降、通訳者が来るまでの数分間、二言語を明確に分けて同じことを繰り返す話し方で続けた。

このように文単位での使用の場合、実用性が明確でない。それに対して、単語レベルでの使用は、ネットワーク内での一定の実用的意義を備えているようだ。ノヴァ・アメリカの集まりでの資料やメーリングリストで送られるファイル名には、„*PROZEDURA*“ [*Prozedur + procedura*]（進行）、„*tagsporządek*“ [*Tagesordnung + porządek obrad*]（議題一覧）、„*organizacjon*“ [*Organisation + organizacja*]（組織）、„*zaproszladung*“ [*Einladung + zaproszenie*]（招待）、„*anmeldszenie*“ [*Anmeldung + zgłoszenie*]（参加申し込み）といった概念が見られる。このような合成造語が、二言語での繰り返しを避けて紙面や場所の節約にもなることは、項目の多くが合成造語で記されているノヴァ・アメリカのウェブサイトからも明らかである。たとえば、*Uniwersytät*（大学）は *Universität* と *uniwersytet* の合成である。文字化によって両言語の合成が可視化されることは、「ノヴァ・アメリカ語」がめざす越境アイデンティティを示す象徴的効果を高める意味もあるだろう。



#### 例11 ノヴァ・アメリカのトップページの項目一覧<sup>(40)</sup>

以上見てきたようにノヴァ・アメリカ語は「言語」というよりは「言語企画」であり、形式的にも多岐にわたっている。「混合語」を標榜するものの、決まった文法規則がみられるわけではなく、コード混合のような形式に近いものの、繰り返しみられるパターンとして成立しているわけではなく、それぞれの語や表現が場合によって自由に組み合わせられる点ではむしろコード切り替えに近い。またコード切り替えのタイプとしてはどちらかの言語を優先しない交代型を意図していることは明確であるが、例6 (*szlak* → *szlaku*)、例7-1 (*Rok*

(40) Nowa Amerika [http://www.nowa-amerika.eu/] (2020年8月31日閲覧).



-> Roku)、10-3(tłumacz-> tłumaczowi)のようにポーランド語が文内での格に応じた変化をしていないため、事実上、提案者の母語であるドイツ語を基調言語とする挿入ともみなしうる。

レベル的にも、両言語を自在に使う専門的な講演をこなすような高い言語能力をもつ提唱者によって使われている反面、現実の使用がきわめて限定的な語レベルにとどまるため、A1からC1レベルの間で、特定することが困難である。機能としては、効率的なコミュニケーションという実用的な側面をもつものの、象徴性がきわだつ。形式面からも言語行動の面からも特定が困難であるという「ノヴァ・アメリカ語」の特徴自体、さまざまな境界づけをこえることをうたうこの言語企画のねらいを象徴しているともいえるだろう。

## 5. おわりに：言語混合の効用と限界

ここまで、言語混合の位置づけおよび具体例をみてきた。最後に、本稿でとりあげた言語混合の、方略としての位置づけを確認したうえで、形式、レベル、機能それぞれについてまとめて、今後の課題についても検討する。

まず、言語混合の種類としては当事者の一部(主にポーランド人、またポーランドと密接の関わる立場にあるドイツ人)による非対称的な使用(IX)がほとんどであり、当事者が共有する方略(X)としてみられたのは協力センターのみである。これは、構成員が両言語の高度な運用力を持つことが前提となるこのセンターが、地域において特殊な存在であることを反映しているといえる。

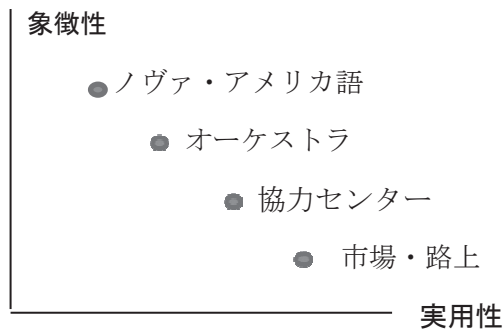
形式面では、路上の会話においても越境協力の場(オーケストラ、センター)においてもコード切り替えがみられ、コード混合は、一般のドイツ人とポーランド人が直接やりとりする主な場となっている市場でみられた。それをさらに発展させて混合語をつくろうとする「ノヴァ・アメリカ語」の試みは、実験的な問題提起にとどまっている。より密接な言語混合が限定的であることは、自由な往来が行われるようになってからの期間が短いこと、および交流が日常化したとはいえ越境コミュニケーションは市民の生活においてはごく限られた場であるということの証でもある。

レベル面では、A1からC1までみられた。このことは、言語混合が初歩的な使用にとどまらず、高度な多言語使用の選択肢ともなりうることを示している。なお、C2はそもそも該当する場が限られるため(専門的、抽象的な主題が扱われる大学での議論など)、C2レベルの言語混合例がみられなかったことは驚くべきことではない。

機能面では、いずれの場合も実用、象徴の両面が想定できるが、いわば急場しのぎの意図せざる言語混合である路上や市場での言語混合は実用的側面が高いのに対して、意図的なノヴァ・アメリカ語は象徴性が前面に出ており、センターとオーケストラは、実用性と象徴性がいずれもその中間であるといえよう。ほぼ決まった表現に限られるオーケストラ

の方が、象徴性が高く、コミュニケーションの効率性の観点からの切り替えがみられるセンターの方が実用性が高いと解釈することができる。

表4 言語混合の機能



本稿の事例から浮かび上がる言語混合のあり方は、公式的な場に進出するきざしはみえないという意味で言語混合への批判的意見を裏付ける。言語混合の多様な形式にも現れるように、他方略に比べて言語混合は標準化されていない不安定な手段であり、それがゆえに公式的な場では避けられると考えられる。他方で、異言語間コミュニケーションで言語混合を行うことは、必ずしも「きちんと」話すことができない「不完全な多言語使用」だけではなく、一つの言語だけでは表せないことを表現する機能を持ち、複数の言語を個別に用いるのとは異なる独自の意義がみられる。きわめて柔軟性に富む言語混合は、両言語の話者間での効率的な伝達および一体感の醸成がはかれる手段ともいえるのである。初歩から高度なレベルまで、また実用から象徴までの機能を発揮することができる大きな可能性をもっている。

これらのことから、本稿の事例は、一方で、言語混合をヨーロッパにおいても異言語コミュニケーション方略の一つとして明確に位置づけるべきであることを示唆する。本研究では具体的な使用のあり方を特定することに重点があったが、今後、定量的な分析や話し手の意識に関する調査を行うことで、諸方略の間での言語混合の位置づけをより明確にすることができるだろう。また、異なる社会言語的背景をもつ他地域の事例研究を積み重ねていくことで、言語混合の意義や限界がさらに明らかになるにちがいない。